
恋の模様、銀の指輪

ゆゆき@RW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の模様、銀の指輪

【Nコード】

N9368D

【作者名】

ゆゆき@RW

【あらすじ】

好きな彼から指輪を貰った私。その指輪をはめた時から彼しか考えられなくなって……

第1話：恋の模様、銀の指輪（前書き）

この回はそうでもありませんが、次回からエロくなっていきますのでご注意ください

第1話：恋の模様、銀の指輪

二人が別れる場所、少年が指輪を拾った場所での前日の夜の話。

「全く、何よこの指輪。愛する人と感情をリンク出来る、両思いならば外れないとか嘘ばっかじゃない。本当ならば私とあの人の指輪が外れる訳が無いわ。全く、もしかしたらと思って少しでも期待した私が馬鹿だったわ。もうこんなもの見たくも無い、どっかに行つてしまえ」

そして指輪は女に投げられた。

太陽が沈みかけ、赤く染まった町で、まだ残っている冬の冷たい風を受けながら私は考える。冷たい風が吹いているが寒くは無く、もう必要の無いはずの手袋をつけて私は手に汗をかいている。

「どうしたの？」

学校が終わり、一緒に下校している幼馴染が私に聞く。ちょうどどうやって話を切り出そうかと悩んでいたその時だった。流石幼馴染、私のこの心の変化も読んでくれたのか。

「実はさ、見て欲しいものがあるんだ」

私はそういいながら制服の胸のポケットに入れた指輪を彼女に差し出す。指輪には何の宝石も無く、ただの鉄の輪に見えた。だがよく見てみると表面に線が沢山ひいてあり、美しい模様となっている。重さはあまり無く、どこにでもありそうな洒落たアクセサリーだった。

「この指輪がどうしたの？」

受け取った指輪を早速指にはめながら彼女は聞く。全くその様な物に興味の無い私が持っているのを不思議に思ったのだろう。

「今朝、学校に来るときに拾ったんだ」

今はその事を物凄く後悔している。ああ、何故拾ったのだろうか。

「学校に来るときに光る物が見えて、綺麗ななと思って拾ったんだよ。それでどうせ安モンだろうし貰っておこうと思って拾っておい
た」

左手の手袋を外して、彼女とお揃いの指輪を見せながら私は続けた。

「けど途中で申し訳なくなつて、指輪を外して近くにおいて行こうと思つたら外れなくて。付けたときはそうきつくなかつただけだね」

その時、彼女が自分が指にはめた指輪を外そうと思い、苦戦する。やはり指輪は外れない。どうやら彼女も同じようだ。

「何でそんな指輪を私に渡すのよ」

怒りながら彼女は言った。怒って熱くなるようなタイプではないが、根に持ってブツブツ言うようなタイプである。

「渡したが、まだつけてみるとは言つてないんだけどな」

問題は外れない指輪をどうするか、なのだ。朝拾つて今まで何も案が思いつかない。力に任せても取れないし、糸を通して取れない。ならどうすればいいのだろうか？

「それで、どうするのよこれ？貰っちゃうよ？」

流石幼馴染。私の言いたいことを見事に解ってくれる。

「そうしてくれ。もしも外れても返さなくても構わないよ」

そうして何時もの場所で私と彼女は別れて、お互いに自身の帰路を歩いた。

幼馴染の彼と別れた帰り道、彼女は指にはまっている指輪を見ながら呟いた

「全く、酷いわね…外れない指輪と知っている指輪なんて渡して」
だがそう呟いている彼女は怒つてなどいなく、笑みが浮かんでいた。

でも、どうしてこの指輪をはめた時にはそうきつくなかつたのに

抜けないのだろう？長い間外さなかった指輪が外れない、という訳ではなく付けて直ぐに外そうとしても外れない。指の時間だけ早くなっているのだろうか。ありえない話だが、指輪が抜けないのもありえない話なので考えてみる。だが指は変わらないし、また爪も伸びていない。……などとその様な事を考えたが、本気で考えてなどいない。私が最も気にしているのはこのような疑問や不思議ではなく、ただ一つの事実、この指輪が彼とのお揃いであることだった。そう思うと嬉しくてたまらなかった。今までずっと幼馴染だった彼に、想いを告げようにも彼は私の事を幼馴染としか思っていない、冗談かと思われて笑い飛ばされるだろう。だが、いつかは伝えたいと思っていてその機会をうかがっている。いつかは、いつかは彼にこの思いを伝えたい…

家につく頃にはもう、夕食の用意ができていた。いつもの速度で歩いたつもりなのだが、そうやら考え事に夢中になってしまいいつもの速度よりも遅く歩いてしまったようだ。家に帰り夕食を食べる何時もと何の変わりはない。ただ、気持ちが少し浮いていると思う。というのは、私はいつもと変わらない夕食をとろうと思い、何時もと変わらない夕食をとっていたのだが母に指摘されたのだ。

「どうしたの？何かいい事でもあったの？」

だが母に言ってからかわれるのも癪なので特に何もないと伝え、話題を変える。母も私が何も言わないとわかり、変わった話題に乗る。だが自然と話は戻る。というのは、何故か私の出す話題はどれも彼に關係する話題だからだ。サッカーが好きだという話題を出したら自然と彼の話題になり、今話題の歌手が嫌いだという話題を出したらこれもまた彼の話題になった。それも母が変えているのは無く、私を変えている。指輪を貰い、気分が高まっているからだろうか、彼の事を思っただけで私も自然と彼の話題を出していく。一体私はどうしているのだろう？夕食を終えて、逃げる様に風呂を浴びる事にする。

彼は私の事をどう思っているのだろうか？湯に浸りながら指輪を見ていたら、私は思った。きつとただの幼馴染としか思っていないだろうな、と思つてまた違うことを考える。

もしも私が幼馴染で無かつたら彼の彼女になれたかな？もしもの話。彼にとつて幼馴染の私から幼馴染をとつたら、彼の何になるのだろうか？彼女になればいいな、と思うがまた一つの疑問が浮かぶ。

幼馴染で無い私を彼は彼女にしてくれるのだろうか？彼以外の男性は苦手であり話さず、同性ともあまり話さない内気な私。彼と話することができるのは幼馴染だからなのだろう。幼馴染では無い私は今のように親しくなれるのだろうか？また、私よりも綺麗な子がいる中で私を彼女にしてくれるのだろうか？

顔は童顔とよく言われ、胸のふくらみは他の人と比べると小さい。また、身長は彼の肩程度しか無い。ただ、体のどこかに自慢があるとしたらこの長い髪だろうか。幼い頃から伸ばし続け、大事にしてきた髪だけが自慢の典型的な日本少女である。こんな私を彼は好きになってくれるのだろうか？そんな事は自身ではなくいつも会っている彼に、いつも登校している彼に聞けばいい。だがそんな事は出来ずに悩み続ける。もしも期待した返事が来なかつたらお互いに気まずくなり、今の関係よりも悪くなってしまう。それは避けたい。

彼に伝えずに想つてこのまま一緒に居たい。だが期待した返事が返つてきても、私はどうすればいいのか解らないだろう。だが今よりも彼との距離が近くなるだろう。そうしたらやっぱりやるのかな？

その時、一気に恥ずかくなり、長湯でのぼせて赤くなっていた頬は恥ずかしさで更に赤くなった。やる、といったら当然アレしかない。そして光る指輪を見て、彼に見られている様に感じ更に恥ずかしくなり、風呂から上がった。

一体私はどうしたのだろうか？指輪を付けたあの時から、こう彼

を強く意識し始めた。彼から貰った指輪の効果なのだろうか。指輪を見るたびに彼を意識する。私はその指輪を隠すようにして、手を枕の下に入れた。体が熱い。明日も早起きして学校に行かなければならないのに、全く寝付けない。彼は一体どうしているのだろうか？彼も指輪で私の事を意識して寝付けない、だなんて思ったがそんな事は万が一にも無いだろう。私は彼の幼馴染なのだから。

第1話：恋の模様、銀の指輪（後書き）

春エロス2008投稿作品。エロくしようと思いましたが全然なっていない。なので次回からそれっぽく。

指輪はじじ模様〜Last Part（前書き）

第二話、最終話投稿

指輪はヒビ模様〜Last Part

寝付けなかったが、気づいたら寝ていた。寝た気が全くしないが、もう朝の目覚まし時計がなっている。そして起きた私は顔を洗うよりも、ベットから起き上がるよりも前に指にある彼から貰った指輪を確認した。だが指輪はそこには無かった。

枕元に割れた指輪があった。

まるでガラス細工を落とした様に指輪が割れていた。

もしかしたらこの指輪には何かの魔法があったのかもしれない、と私は思った。彼の事を意識させる魔法でもあったのかもしれない。指から外れない魔法でもあったのかも知れない。

何故割れたのか。きっと彼を思う私の気持ちが指輪を壊したのだろう。それとも指輪の魔法 彼を思う魔法 が切れて指輪は割れたのだろうか。

握った手の中にある指輪は冷たく、開けてみると指輪に書いてあった模様も消えていた。

全て想像の話。

魔法の指輪なんてものは無く、彼の事を意識しているのはいつもの事でそれを指輪のせいにしたただけなのではないだろうか。外れない指輪も、私が無理をしてはめたのだろうか。

割れたのもきっと安物の指輪だったからかもしれないし、模様が消えたのも安物だからだろう。鉄に見えるが実はメッキで上手く加工されているだけなのかもしれない。

これらも全て想像の話。

メッキで加工されているかどうかは鉄やすりで削ってみれば簡単にわかるだろう。だが魔法については確かめようが無く、ただ私が有り得ないと思いつつも期待しているだけである。

なら、と思い私は指輪を窓から遠くに投げた。小さく鉄の音がした。確かめてメッキがはがれて残念な思いをするよりも、少しの期待を持ちたかった。

投げられた指輪は二組あった。両方とも、二人が拾った時には無かった模様のようなヒビが入っていた。

本当に指輪に魔法があるのかどうかだなんてわかりはしない。

ただ、人がそう信じ思えば魔法の指輪になるのである。

また別のカップルが指輪を拾ったのは別の話。

指輪はじい模様 Last Part (後書き)

エロシーン……？

全くありませんね困った困った

すいませんすいませんすいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368d/>

恋の模様、銀の指輪

2010年10月8日15時31分発行